

ミツカン水の文化交流フォーラム2007

「2107年の水文化～少人口・温暖社会という悲観シナリオを超える夢～」

2007年10月31日 開催

「100年後の2107年の水文化を語ることに意味があるのか？」答えは「大いにある」です。「温暖化対策」と「少子化」が相互に影響を及ぼし合う重要な問題であることを私たちは既に知っています。現在の延長として未来を描くのではなく、自分は生きていなくても子どもや孫の時代を考えると、今つくるべき社会の方向性が見えてくるのではないのでしょうか。そこで、本フォーラムでは「日本の水文化 100年後の夢」についてディスカッションを行ないました。

【テーマセッション】

「地球シミュレーターが描く 将来の水環境」

江守正多 国立環境研究所地球環境研究センター温暖化リスク評価研究室長

「日本の人口・経済社会と気候変動」

鬼頭 宏 上智大学経済学部教授

「市場経済を超えることはできるか」

小長谷有紀 国立民族学博物館教授

「地球環境問題と水文化」

村上陽一郎 国際基督教大学大学院教授

【パネルディスカッション】

「2107年 日本の水文化の夢をかなえる10のポイント」

コーディネーター：沖大幹 東京大学生産技術研究所教授



テーマセッション

地球温暖化のシミュレーション研究を行なっている江守正多さんは「100年後には夏が今より2カ月くらい多い感覚になる」などシミュレーション結果をいくつか紹介し、「実際に温暖化を止めるためには6%ではなく、今より60%くらいの排出量を減らさなくてはいけないことになる。50年から100年かけて、二酸化炭素をほとんど出さないような新しい文明を我々は目指していかねばならない」と結んだ。

歴史人口学を研究してきた鬼頭宏さんは、縄文時代以降の歴史を振り返ると、人口の増加減少には波があると述べる。時々人口収容力を規



定するのは食糧生産などに影響を与える「文明のシステム」であって、気候変動がただちに人口増減をもたらす単純なものではないと述べ、「どのように国土を利用するか考える上で、水をめぐるライフスタイルは重要」と、文明システムを変えることの重要性を指摘した。

モンゴルをフィールドに、最近では牧畜社会への市場化のインパクトに注目している小長谷有紀さんは遊牧民の生活写真を示し、「これを遅れていると見るにしろ、懐かしいと思うにしろ、私たちが持つ『社会が開発されていくことを無意識に前提にしていること』が環境問題の本質にある」と鋭く指摘した。また、モンゴルの遊牧の世界では植生に合わせ

て移動できる距離が環境保全のために必要だったのに、現在、市場との距離が重要視され、食用にされるオスが市場に近い都市近郊では少なくなっているというデータを示した。そして「環境保全型経済を考えよう」とすると、お布施の論理のような互酬経済を皆で考えなければならぬのではないかと提言した。

日本における科学史研究の第一人者である村上陽一郎さんは「資源としての水」、「基本的な人権としての水」、「水戦争や水への民間投資の問題点」などの話題を紹介し、予測において科学という方法が持っている本来の不確実性の存在を指摘した。「それを前提とするならば、私たちは『事前警戒原則 (precautionary principle)』で環境問題に対処していかざるを得ない。100年後、私たちが会うことのない子孫たちが喜んでくれることを達成するためには、何でもやっつけていこう」という世代間倫理を持つことが、「悲観シナリオを超える夢」なのではないかと結んだ。

どの報告も、最後には「どのよう文明をいかに築くか」という視点に収斂されており、単なる偶然で済まされない、これからの方向性を感じさせられた。

ディスカッション

コーディネーターは沖大幹さん。

水の専門家の立場でフロアからの質問を取り上げた。一見水とは直接関係ない事柄を議論に載せ、これからの水文化を考える本質的な視点に切り込んでいった。

詳細については、当センターホームページでご覧いただくとして、最後に沖さんの一言を紹介しよう。

「今の時代、手段の目的化が起きているのではないだろうか。本当は100年後もみんなが幸せで健康で文化的な生活を送ってほしいから、その目的を実現する手段として温暖化対策や国土形成計画を考えるのに、いつのまにか手段が目的になっている。そうならないように、私たちは常に物事の本質を忘れないように、目的を押さえていくことが必要なのではないでしょうか。」

アンケートに寄せられたコメント

100年後の日本を考えるよい機会となった。子孫のためにも今後も考えていきたい。月並みな環境論より、本質に肉薄することへのヒントが多かった。

センスを感じた。水の話をするときには水そのものにフォーカスしているだけでは問題解決が進展しないから。水以外の話が実は水に関連していることが大事だから。

私は生きていない先のことですが、貧しくて豊かに生きていたのである100年前を振り返ると、今、私の生きている環境がもっと生きやすい環境となることを望んでいるから、自然の恵みを大事に地球を守りたいものです。

現在を飛び越えた最先端の言葉が聞けなかったのは残念であった。例えば水河が溶けていけばどうなるのか、国際的に大変な問題になるというイメージは何も伝わってこなかった。

100年後にはあまり意味がない。問題点が弱くなる。

■水の文化29号予告

特集「水産の流通文化史」(仮)

生活者にとって守るべき魚食文化とは。魚流通の川上から川下までの流れ、つまりフードシステムを追いかけながら、さまざまな技術が現代の魚食文化をいかに変えてきたのか、どのように変化していくのかを探ってみます。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。ユニークな水の文化実習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

編集後記

◆ 石油の高騰が、暮らしに大打撃を与えるこの頃だが、このことが、資源エネルギー基盤型から、自然エネルギー基盤型に変わる、政策のキッカケとならないだろうか。この国の風土や地域性に、小水力は適していると思えるのだが、制度的な後押しが不可欠のようだ。(新)

◆ 日本には資源がないと思っていたし、水力はひと昔前のもの、と思いついでいた。とんでもない誤解でした。今回の取材で、水の力でこれだけのことができるんだ！と知り、感動。小水力を活用した未来の社会は、面白い社会になると思う。(百)

◆ ダイナミックに動力を産み出す水車の記憶は残念ながら、ない。蕎麦屋の飾り程度のものだ。生まれ育った横須賀は山が多く坂も多い。斜面を利用して今に宅地開発が進む。せめて水車でも置けないものか、と妄想する今日この頃だ。(ゆ)

◆ 今回、小水力利用が大きな可能性と実効性をもっていることを、実感できた。そう思っていたら、経済産業研究所の小林慶一郎氏が「排出権本位制のスズメ」(朝日新聞、2008.1.26)という小論を世に問うている。自然エネルギー活用への潮流は、予想以上に強い。(中)

◆ 「えっ、小水力発電？ それが県の発電量の2割以上？ へえ～、故郷を見直した！」。酒席での自然エネルギーの話題は、富山県出身の友人を刺激した。現在は神奈川県立高校の教師だが、それ以来故郷の自然エネルギーに関心しきり。郷土愛は自然エネルギー開発の原動力になりそうだ。(恵)

◆ 小水力発電所のような規模の小さな施設は日本の地形にも合う。小さな力を足し合わせる、という考え方には目からうろこが落ちた。こんなに日本が水力エネルギーに富んだ国だとは思わなかった。(力)

◆ 太陽の熱や光、風は誰でも自由に利用できる。しかし、雨は一度地面に落ちると、そこから恩恵を受けるには高いハードルがある。小水力利用は、まずは、所有が確定している「自分ち」の雨水利用から始めるしかないのだろうか。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第28号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日 2008年(平成20年)2月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 秋山道雄 新美敏之 百瀬友美 小林夕夏 辻美代子
中庭光彦 緒方大輔 浅野恵子 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中笠ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 社会・文化活動センター内
Tel. 03(3555)2607 Fax. 03(3297)8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局
〒104-0043 東京都中央区湊1-13-2 アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03(3552)7504 Fax. 03(3552)7506